



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

「海の瞳」論：青春時代の清岡卓行を求めて

著者	王 天起
雑誌名	日本文藝研究
巻	71
号	1
ページ	63-88
発行年	2019-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028331

「海の瞳」論

——青春時代の清岡卓行を求めて——

王 天 起

はじめに

「海の瞳」は、一九七一年一月から七月まで『文学界』で連載された作品である。その後、二回の改稿において、各章の長さが調整され、語り手の人称は三人称から一人称に直された⁽¹⁾。だが、いずれにしても、本作の語り手は清岡卓行である。

語り手は、無論清岡卓行本人である。だが、「海の瞳」は、「アカシヤの大連」五部作の同時期の作品であり、それらは私小説的な小説と言えるが、「海の瞳」はそうではない。その理由は、「海の瞳」の前半と後半の文体が異なっているからである。

小説の一章から五章までは、清岡の実体験によって成立した部分である。この部分の文体は、「アカシヤの大連」五部作との類似性があり、私小説的な書き方で成立した部分と言ってもよいが、それに対して、六章から最後までは、「二十歳のエチュード」と「死人覚え書」の記述に基づき、清岡の想像を加えて成立した部分であるから、私小説的な書き方とは言えない。この部分の文体は、死んだ人と呼びかけようとしているものである。「原口統三。」とい

う名前が繰り返しあらわれるのは、この文体の特徴である。十一年後の作品「サハロフ幻想」は、「海の瞳」の六章から十五章までの部分とほぼ同じ文体で成立した作品である。

前後半で文体が異なっているが、語り手は両方とも清岡卓行だと思われる。本稿では、一章から五章までを小説の前半、六章から十五章までを後半とする。

前半と後半と、共通性がないわけではない。一つ著しい共通性は、清岡の記述と推論を事実として鵜呑みにすることがよくない。小説の語り手、つまり清岡卓行の記述は、信憑性が低い記述である。なぜかというと、彼は自分自身の考え方から出発し、原口統三の言動の理由を推測するからである。中心人物の原口統三は、語り手の清岡にとって、まさに自己のもう一つの可能性として描写されている。

「海の瞳」では、作中の原口統三の精神世界に、清岡の考え方と原口の考え方が混じっている。どこまでが本物の原口統三で、どこまでが清岡が自身の体験に基づいて作った原口統三なのかについて分析することが、本稿の中心である。

清岡と原口は多くの共通点をもった人間である。二人は共に、詩に親しんだ人間であり、青春時代には死への熱情が強く、また、植民地二世として成長した。しかし、その共通性ゆえに、語り手は自分なりの考え方にに基づき、原口統三の行爲を解釈することがある。この点について、詳しく論じる。

「海の瞳」で言及される清岡の心情や自殺への情熱などは、若い頃の清岡が持っていたものである。つまり、五十代になった清岡が小説の語り手の立場で、二十代の清岡と十代の原口を描いているのだ。本稿で論じられている清岡の感情や考え方などは、小説での二十代だった清岡卓行という人物のものであり、五十代の語り手である清岡卓行がもっているものではない。

最後に、この論の一番重要な論点をまずここで記しておく。

「海の瞳」で、清岡と原口の共通性を強調し、差異を無視した書き方が使われた理由を明らかにする。そのうえで、それが清岡文学の中でいかに位置づけられるかについて、論じていきたい。これからの一、二章の分析と三章の論は、この大きな論題とつながっている。

一 ふるさと観

小説では、原口統三のふるさと観に対する推測が散見される。しかし、語り手である清岡卓行の叙述による原口統三のふるさと観と、実際の原口統三のふるさと観には、差異がある。

「アカシヤの大連」五部作で、清岡卓行は自分のふるさと観が分裂したと述べている。清岡にとって「ふるさと」は、「風土のふるさと」と「言語のふるさと」に分けられたのである⁽²⁾。

……彼の内部のどうしようもない矛盾に対応していることにも、彼は気づかないわけにかなかった。それは、自分が大連の町にしか〈風土のふるさと〉を感じないのに、もう一方においては、日本語にしか〈言語のふるさと〉を感じないということである。

そして「海の瞳」でも、「風土のふるさと」と「言語のふるさと」という言葉が使われている。

原口統三や私の場合、いくらか図式的に言えば、故郷はある痛烈な矛盾の上に成立していた。

〈風土のふるさと〉は大連という植民地、つまり本来は他国のものであるはずの地理的な空間であり、〈言語のふるさと〉は

日本語という母国語、つまり遠い海のかなたの祖国で大昔に根をおろし、そこでこそ自然に充実する精神的な空間であつた。

また、清岡は「原口統三——「私の中の日本人」を問われて」でも、原口統三の自殺した理由が、「風土のふるさと」と「言語のふるさと」の分裂と直結しているとのべている⁽³⁾。

彼の死の根底的な原因は、私は、「風土のふるさと」である大連とその家庭が奪われていたこと、そして、「言語のふるさと」である日本語による精神の純粹化、死への志向は、自他どちらからも破壊されないほど論理的かつ皮膚感覚的に形づくられていたことに眺めたのである。

だが、本当にそうだろうか。

まず、原口統三の遺稿「二十歳のエチュード」には、自分のふるさと観が分裂したということに関する表現がない。大連に関する表現は多くあるが、原口の大連に対する賛美は、清岡の大連に対する郷愁と違うところがあるだろう。清岡にとっては、大連は忘れられない故郷である。それに対して、「二十歳のエチュード」では、大連が一つの美しい町として賛美されている。「海の瞳」ではこれに関連した部分が引用されるが、清岡の引用は、恣意的なものになっているのである。

「海の瞳」での引用は以下の通りである。

大連よ。アカシヤの芳烈な花々に満ち溢れた六月の植民地よ。緑山の頂きには海風が舞ひ、高台の上では巨大な病院が健康な眠りが貪り、荷揚げ波止場は支那語の叫喚に包まれ、酒場の地下室からはロシア語の合唱が聞こえ、さうして、舗装道路の両側につつましく並んだ小綺麗な洋館の窓陰では、黄色い皮膚をした知識人が、畳の上でドイツ語を読んでいる。

嘗て、この港の棧橋に立てて、僕の少年らしい魂は、遠い行く末を美しく夢みたのだった。

大連よ。

戦争が、お前と僕とを隔離した。

つけくわえれば、原口統三を追懐する「アカシヤの大連」の忘れ得ぬ友」『潮』（潮出版社、一九七〇年八月）も、清岡は同じように引用している。

だが、原口統三の「二十歳のエチュード」（角川文庫、一九五二年六月三十日）の原文は、つぎのようになっている。

大連よ。アカシヤの芳烈な花々に満ち溢れた六月の植民地よ。緑山の頂きには海風が舞い、高台の上では巨大な病院が健康な眠りを貪り、荷揚げ波止場は支那語の叫喚に包まれ、酒場の地下室からはロシア語の合唱が聞こえ、そうして、舗装道路の両側につつましく並んだ小綺麗な洋館の窓陰では、黄色い皮膚をした知識人が、畳の上でドイツ語を読んでいる。

かつて、この港の棧橋に立てて、僕の少年らしい魂は、遠い行く末を美しく夢みたのだった。

大連よ。

戦争が、お前と僕とを隔離した。けれども僕は、お前のことを忘れていた。僕は勇ましい「駄々っ子」だった。（傍点引用者）

清岡が大連を「忘れていた」というような話を、口にする可能性は全くない。つまり、傍点部以下は、清岡と原口の大連観における根源的な違いをあらわした部分なのである。しかし、清岡は引用で、原口の文章から郷愁と懐古しか読み取れないようにしているのだ。

原口は、大連の美しさに対してもちろん愛着をもっているが、清岡のように強烈な愛着であったかにはまだ疑問がある。そもそも、原口は、大連が彼の故郷だとはっきり言ったことがない。

前文で示したように、清岡は、この箇所を同様に引用しているのだから、傍点部以下を引用しなかったのは、意識的な行為であった可能性が非常に高い。では、その理由はなんだろうか。

まず、原口統三の経歴を確認してみよう。清岡は大連で生まれ、成長したが、原口は違う。彼は朝鮮の京城で生まれ、満州の各地を転々として少年時代を過ごした。大連は、原口にとっては、ただ一つの故郷ではなく、経験した一つの町である。それゆえ、清岡の郷愁は、ただ一つの故郷を喪失した郷愁の感覚である。それに対して、原口はただ一つのふるさとも持たない。だから、二人の喪失感には差異がある。

「海の瞳」で、清岡はこのように述べている。

ここに植民地で生まれ育った一人の日本人の転転とした移住の記録があるわけで、いくつかの都市のうち、原口統三は大連を自分の故郷と思っていたようである。というのは、彼がとくに大連についてノスタルジックな言葉のかずかずを残しているからだ。

ここで、「原口統三は大連を自分の故郷と思っていたようである」という曖昧な言い方が使われている。おそらく、彼は二人の共通点を多く強調し、自身の出発点として原口の内心活動を推測し、そのうえで、「海の瞳」でのキャラクター「原口統三」を描くのである。

実際の原口統三に、大連に対する郷愁が多少にもあった可能性がないわけではないだろうが、「海の瞳」で書かれる原口統三は、ほとんど清岡のようなふるさと観を持っている。そのようにいえる理由の一つとして、先述したように「風土の故郷」と「言語の故郷」ということを強調することがあげられる。清岡は、自己の内面を分析するとき使うこれらの概念を使い、原口統三を分析する。

確かに、清岡と原口は同じく植民地二世（コロンの子）であり、先述したように思想上の共通点も多い。だが、共通点が多くても、ふたりのふるさと観が同じものだとまでは言えないだろう。コロンの子の中でも、ふるさと観には、さまざまなタイプがある。

「海の瞳」には、もう一箇所、清岡が原口の故郷を大連だと判断するところがある。

今日、「二十歳のエチュード」を読みかえしてみても、私は多くの言葉が精神的に潔癖な意味を持つと同時に、肉体的にアレルギーの意味を思わずにいられないが、（二十年ほど前はほとんどその精神的な意味しか受け取らなかったが）故郷の問題の場合にも、そのように二重にせつなく響く言葉を見いださすにはいられない。たとえば、次のように簡潔な述懐。

故郷はない。それなのに、僕は己れの故郷以外の土地には住めない人間なのだ。

結局、原口統三にとっても、またたぶんそのころの私にとっても、大連という都市とその郊外のほかには、ぞんぶんに快い呼吸をしたり思いきり奥深い睡眠をとったりすることができそうな空間は、ほかにないように思われていたのだ。さらにいえば、人間たちそれぞれに気ままな日常の暮らしが季節の移ろいと矛盾することのないような土地、あるいは、月日が流れていくということ自体にひとすじの自然な喜びが感じられるような環境、それはおのおのの故郷のほかにはないように思われている。

原口の「故郷はない。それなのに、僕は己れの故郷以外の土地には住めない人間なのだ」ということが引用されているが、これを書いた時、原口は東京にいて、生涯大連に戻ることはなかった。清岡のこの推論から、彼の美しい故郷が失ったことに対する自分自身の哀れみは読み取れるが、清岡の自意識しか読み取れず、その論理は原口にとっ

ては適切ではないだろう。

「二十歳のエチュード」で、大連のエキゾチズムを表現する部分がある。

他の国の下で、若者は、自分の町を思い出す。ロシア少女の甘い、嗟れた声が、夢の中で彼を招くのだ。

「ダルニー」とただ一言。

すると、その言葉は、不思議な魔法で彼を縛ってしまう。

そして、若者はきつと憑かれたように、生まれた町にかえって行く。

ここでなぜ「生まれた町」を使うのか。年表によつて原口の生まれた町はソウルであるが、暮らしたことがないので、深い感情などがあることが不自然だろう。あるいは「他の国の下」という表現だ。「二十歳のエチュード」を書いた時、原口は祖国日本にいるのではないだろうか。

やはり、「生まれた町」は実在の都市より、精神の故郷とかの意味を持っているようである。「他の国」も、彼の精神世界のどこかを指している。大連は原口にとつて「青春」を象徴し、自己のアイデンティティを確立した町であるから、それを比喩的に「生まれた町」、「自分の町」と表現する。だが、原口は大連を清岡のように「風土の故郷」として考えることがない。原口にとつて、「故郷」という言葉の意味は、清岡より抽象的であり、現実中に存在している土地を指していない。

だが、清岡にとつても、大連は「青春」を象徴し、自己のアイデンティティを確立した町だろう。二人の個人的な論理が生まれたとき、また詩を書き始めた時が同じく大連時代である。しかし、これは郷愁との関係がない。「萌黄の時間」に表現されているように、清岡は幼い頃からの、大連の風土に対する親しみと、その親しみによって精神世

界の変化こそ後日の郷愁の成因である。

明らかに原口はこのような体験を持っていない。だから二人の喪失感が違う。清岡にとっては、大連に対する「到達できない愛」は若い頃の彼の喪失感の全部である。それに対して、原口の喪失感とは、彼に創作のインスピレーションを与えた美しい町を失った感覚である。清岡の喪失感には、大連は掛け替えのない存在であるから、胸の中の大連に対する追懐は永遠に解消できない。逆に原口の立場なら、もし新しい心から慕う土地があれば、自分自身で大連への追懐を解消することが可能である。

このような心情の差異があるにもかかわらず、清岡は原口の「二十歳のエチュード」での大連に対する賛美を郷愁として理解した。彼はわざわざ、二人の差異を無視した。

愛はまさに我々の故郷に違いない。僕は故郷を持たぬ。

「二十歳のエチュード」で、このように述べている。この文から、原口が「故郷」という言葉に「大連」や「日本語」などのような実在のものではなく、精神上の意義を強調したいことが読み取れる。もともと、原口はその故郷観の定義を詳述しておらず、清岡のようにきちんと整理されていかなかったが、清岡の概念と違うということは明らかだ。

ゆえに、原口統三にとって、「故郷はある痛烈な矛盾に成立にしていた」可能性はもちろんあるが、清岡のように故郷が「言語」、「風土」または「血縁」⁽⁴⁾に分割するふるさと観が持っていないといえる。

だからこそ、清岡の推論は、彼の大連に対する感情に影響されて客観性が失われているのだ。

加えて、「二十歳のエチユード」で、原口統三は、「日本語は純潔性がない言語だ」と述べている。「二十歳のエチユード」のさまざまなところで、精神の純潔性を求める原口にとって、日本語に対する不満があることが散見する。

虻蜂取らず。——外国文字を国語で発音した上古の日本人よりも、さらに数等愚劣なのは、国語を外国文字で書こうという、近代の気狂いどもだ。

こうしたことにより、小説で表現されている原口統三は清岡の意識を反映する存在であることがわかる。その理由は、清岡は勝手に原口の故郷認識に、「風土」と「言語」の分裂を描いたからである。作中の原口統三は、若い頃の清岡卓行のようなふるさと観を持っている。

最後に一例をあげよう。

つまり、原口統三が懐かしがっているのは、かつての植民地大連において話されていた日本語の大連ではないかと思われる。

この「海の瞳」の登場人物である原口統三がなつかしがっているとされているものは、まさに清岡が懐かしがっているものである。やはりここの原口の精神世界には、若い頃の清岡の世界観が宿っている。

また、この表現は清岡の罪意識と直結しているともいえる。清岡は「風土の故郷」と「言語の故郷」の合一を望んでいる。その一方で、彼は、日本の大連支配を侵略だと認め、中国に大連を返還することは歴史の必然であると考えている。「海の瞳」の内容からは、主に過去の自己に対する追懐とともに、罪意識が散見される。しかし、「海の瞳」が創

作された時点では、清岡はまだ罪意識の論理を整えていない。この点についても、人称の問題と合わせて、本稿の三で詳しく論じる。

二 女、自殺、そして「哲学」

哲学、言いかえれば人生観に関して、清岡が持っているのは「憂鬱の哲学」であるが、原口が持っているのは「純潔の論理」だ。両方とも、自殺に直結する人生観であるが、相違点も多くある。本稿では、これらの違いがあっても、清岡がわざわざ類似性を強調する理由を論じる。

一九四〇年代の二人の人生観には、確かに大きな共通性がある。それは、清岡の「憂鬱の哲学」であっても、原口の「純潔の論理」であっても、女性観が不可欠な一部であるということである。ゆえに、二人の女性観を分析する必要がある。また、二つの考え方は共に、自殺への情熱がある。この点について、「海の瞳」の「4」、「なぜ自殺したのだろう」という疑問にさらに取り組もうとしなかったのは、私自身の問題として自殺がしだいに縁遠いものとなっただろう」と述べている。

若い頃の清岡にとって、「憂鬱の哲学」は精神の内核である。その実質は、死生観である⁽⁵⁾。

「憂鬱の哲学」は、「アカシヤの大連」に出てくる言葉である。「海の瞳」の3と4の死と生の問題に関連する部分は、「憂鬱の哲学」の内実が多く読み取れる。しかし、「海の瞳」では、清岡は自分の「憂鬱の哲学」に基づいて、原口統三の「純潔の論理」を解釈している。ここで、一例を挙げよう。

自分においていわば生の芳潤な魅惑への方角に屈折した純潔の論理と、原口統三においていわば死の沈黙の実現の方角に完

壁化されたような純潔の論理。

この引用からは、二つのことが読み取れる。一点目は、「生の芳潤な魅惑」について、「芳潤の生」という相似した表現が「アカシヤの大連」で、「憂鬱の哲学」のなかで使われていることである。「アカシヤの大連」の主人公は、もともと死への情熱が強かったが、終戦以降、妻と会った以降、考え方は死への情熱から「芳潤の生」に変わった。ここで「生の芳潤」は、「死の沈黙」と対峙する言葉として使われているが、この言葉から「憂鬱の哲学」の色彩が見られる。

二点目は、清岡は自分自身の考え方も「純潔の論理」と定義していることである。引用では、二人の思想とも「純潔の論理」だと称されている。ただし、若い頃の清岡が持っていたのは、もともと「憂鬱の哲学」ではなかったか。また、この一作以外、ほかの作品は自分の思想を「純潔の論理」と称していない。だから、この表現から、語り手である五十代の清岡が、若い頃の自分の「憂鬱の哲学」と原口の「純潔の論理」の呼称を混同する傾向が読み取れるといえる。

だが、二人の「哲学」、言いかえれば死への熱情を内包する考え方は、本当に同じなのか。これからは、この点について分析しよう。

まずは、女性観と直結する部分について分析しよう。清岡の「憂鬱の哲学」の中での女性観に関して、「アカシヤの大連」にはこのように述べられている。

彼の憂鬱の哲学に起こったいちじるしい変化のもう一つは、幻想的な女のイメージの出現である。彼が、慕わしい死の中に

のめり込みたい衝動を感じるとき、その自分を引き留めるように作用していたものは、今しがた触れた知的な自己省察であると同時に、悩ましく魅惑的な女のイメージなのであった。実質的にどちらの比重が大きかったかと言えば、むしろ、彼の本能により深くかわる女のイメージの方を挙げなければならなかっただろう。

それは、彼が幼い頃、夕焼の西空におそろおそろ眺めた、歯みがき粉の袋の色刷りの女とはまたちがった、ふしぎに官能的な女であった。空想されたというか、それとも、想像の空間に向こうの方から訪れてきたというか、その新しい女は、匂わしく、ふくよかで、輪郭が定かではなく、溶けるようなその雰囲気によって、一層若しい裸体であった。

「朝の悲しみ」と「アカシヤの大連」には、終戦する前に大連にいた四か月中に、清岡の死への衝動は高まったが、敗戦によってすぐ半減し、妻の出現によって、いよいよ、彼はこの世界を受け入れたことが書かれている。

終戦は、彼に「解放感」と「安堵感」を与えて、自殺への衝動も弱めた。それでも、妻と出会う前には、彼の心象風景はまだ「荒寥とした世界」であった。しかし、妻の「若く美しい魅力」は、彼を「荒寥とした世界」から解放した。彼はまだ世界に対して敵意を持っていたが、妻のために世界と妥協した⁽⁶⁾。

だが、清岡の「憂鬱の哲学」の根底は変わらず、「憂鬱の哲学」をそのままにして、妻と結婚するという外部世界と妥協する形式を選んだから、妻が死んだ後、青春の問題にまた直面しなければならない。「海の瞳」の2でも、妻の死によって——自殺への憧憬が戻った——原口統三の自殺を思い出したという流れで叙述を進めていく。おそらく、一九七〇年代初頭に、原口統三を小説の人物として書く動機の一つは、妻の死によって生じた青春時代の問題の再現だろう。その前の二十年間に、原口統三とかかわりがある人々が様々なところで、原口と清岡の関係を描いたことがあるが、当事者である清岡は、一言も言わなかった。

若い頃の清岡は、妻を「若若しい裸体であった」という観念上の女のイメージと置き換えた⁽⁷⁾。若い頃の清岡にとって、意識の中の女性イメージと直結した妻は、終戦と共に、彼に生を与える存在である。そして、観念上だけに存在するのではなく、現実と直結するからこそ、世界と妥協する理由になり、自殺への衝動を抑止できるのである。

三木卓は、「すなわち、二十数年間、主人公と生活を共にした妻は、大連で知り合った娘であり、主人公にとって、妻はかれの故郷に他ならなかったのである」と述べている⁽⁸⁾。妻は死への衝動と拮抗する存在だけではなく、ふるさと大連の象徴と言っても過言ではない。それに対して、「二十歳のエチュード」に登場する女たちは、どう考え、でも、原口の世界の中で、このような役割をはたしていないだろう。

では、原口の「純潔の論理」において、女性はどういう存在であるのか。「二十歳のエチュード」では、現実中の女性と意識の中での女性の関連についてはっきり書かれていない。おそらく原口はそれを明示することに恥じらいをもっていたが、それでも「二十歳のエチュード」の表現に通じて、原口の女性観を垣間見ることができる。

「二十歳のエチュード」と「海の瞳」での女性観の差異は、「二十歳のエチュード」で表現されているのは主に抽象的な女である。それについて、「海の瞳」では、実際の女性二人を中心に描写されている。たしかに、橋本一明の妹は、「二十歳のエチュード」でも実在の人物として出場しているが、小説の表現の中心はやはり、精神世界にあり、現実の人物ではないと思われる。例えば、「二十歳のエチュード」での女性像はこのように表現されている。

嘘つき万歳の世の中だ。全く、女性は尊敬されなければならない。なぜなら、嘘をつくことにかけて女性ほど巧みなものはないからだ。

僕は嘘を破壊した。

そして、清岡の観念上の女のイメージと最も似ている表現は、以下のものである。

静かに独り、夕暮れの枕べに祈りを捧げている少女の姿は、僕は美しいと思う。けれども、僕のころは、すでに、現代では一匹の野獣でさえ、信あつき少女の仮面を装いungということを知っている。

僕が語り手でなくなることを嘆くまい。

蒼穹を、あの永遠の唾の少女の、美しい瞳を仰ごう。

これらの表現によって、原口にとって、意識にある抽象的な「女性」は、一体どのような存在であるといえるのか。

清岡なら、女性のイメージはいわゆる官能的な、エロチックなイメージである。そして、戦中戦後の醜いと考える現実と拮抗できる存在となる。

しかし、原口の方は「祈りを捧げている」女性像である。中身は野獣であつても、その表面は一見、少女の様子である。つまり、清岡のそれと比べれば、もつと純潔性を持つているように思われる。また、原口の方は、女性のイメージを更に抽象化しており、現実存在する確率はかなり低いといえる。

これが、二人の女性観の異なるところだ。そして「憂鬱の哲学」と「純潔の論理」が根本的に相異するところでもある。「憂鬱の哲学」における、イメージの中の女性像は、現実中の女性に入れ替えることが可能であり、死への衝

動を抑止できる。しかし「純潔の論理」での女性像は、現実の女性と対立して、抽象的な、到達できない世界の純潔の表象となり、現実には存在しない概念である。

前述のように、「海の瞳」で清岡は自分自身の考え方も「純潔の論理」と位置づけている。だが、ここまでの分析により、「憂鬱の哲学」と「純潔の論理」とを同一視することができないといえるだろう。だからこそ、清岡が自分自身の若い頃の考え方を「海の瞳」での原口統三の意識に押しつけたという結論の決定的な証拠であるといえるのだ。

では、「海の瞳」では、清岡はどのように原口の女性観を述べているのか。

気づかなければならないのが、小説の前半と後半がかなり違うように、小説の後半での文体は、一九八二年に書かれた「サハロフ幻想」と類似しており、語り手個人の推測と想像が溢れているということである。後半は、清岡が原口とのかわりがある人の記憶を聞いた上で成立したものである。

3では、大連であった女のこと分析されている。(実体験)

8では、原口統三と橋本一明の妹のことが描かれている。(伝聞)

この二つのところで、小説の前半と後半の描き方の差異が見える。実体験によった3での分析は、原口の深層心理を分析せず、表面的な分析だけで済んだ。だが、女性に対し、恋愛感情を持つことは、思春期の少年である原口統三にとっては、もともと非常に自然なことだ。これだけを分析すれば、原口の意識の中核とする「純潔の論理」の女性観には触れなかっただろう。

それに対して、実体験ではない8での叙述は、逆に原口の内心世界を推測する表現がある。

彼女は、きみがときどき漠然と描く魅惑的な女性のタイプにほぼ合致している。

しかし、「二十歳のエチュード」を確認すると、「魅惑的な女性」と合致する表現は存在しない。また、清岡のほかの作品でも、原口が「魅惑的な女性」に言及する場面はない。では、これは、何に基づいて推測したのか。

「漠然」は、清岡が愛用する言葉である。「朝の悲しみ」、「鯨もいる秋の空」にもあらわれ、「海の瞳」と似た文体を持っている「サハロフ幻想」で、サハロフの考え方を推測するときにも使われる。また、「魅惑的」ということは、「アカシヤの大連」で、若い頃の主人公清岡が実家の密室で、「悩ましく魅惑的な女のイメージ」が見えたというところで使われている。

これらの表現から見ると、引用された部分が表現しているのは、実際の原口の内心世界ではなく、若い頃の清岡の内心世界なのであるといえる。これも、若い頃の清岡の意識が「海の瞳」での原口という登場人物の意識に入り込んだ証拠となる。

もしどうしても相關する表現を探そうとするなら、原口の詩「海に眠る日」は、魅惑的な女性とわずかなかわりがある。10で、全詩が引用されている。そこで、「お姉さん」「お兄さん」という表現が中心に分析されている。

詩としてはたぶん、「お姉さん」に拠る方が優れていたが、きみの精神の方向を暗示するものとして「お兄さん」に拠る方が明確であったということになる。それから一年半ほどしてきみの中に現れてくる自殺の意志を翻させるに足りるほどの愛欲は、そのとき遂に形づくられることがなかったからである。

清岡は、「お姉さん」の方は、「愛欲」の表象であり、性的な意味を持っているが、「お兄さん」に変われば意味を

失い、「自殺」にさらに近づいたのだと判断している。

清岡の理解によれば、女性への愛欲は、自殺への衝動と拮抗できるものである。そして「お姉さん」を「お兄さん」に入れ替えると、自殺の意志と対峙するものがなくなり、結局原口を死に導いた。

だが、ここで、原口の「純潔の論理」と清岡の「憂鬱の哲学」の違う点があらわれている。もし清岡の分析が正しければ、自殺する前の原口の意識には、死と拮抗できる女性への愛欲が存在しない。この点で、清岡の「憂鬱の哲学」とは、かなり異なっている。原口の論理にとって、「女性」は清岡の論理のように非常に大切な存在とは言えないのである。

それゆえ、若い頃の清岡と原口は、思想上の共通性を多くもっているが、やはり、故郷観や女性観などを含めて、意識の内核には違ふところも多くあるといえるのだ。だが、「海の瞳」で、清岡は個人の思想と意識に基づいて原口を描く。二人に関して、吉野弘はこのように述べている⁽⁹⁾。

原口は清岡にとって若き日の精神的分身である。清岡自身、二十歳前後、自殺に強く誘われたことがあると述べているが、清岡は自殺の道をとらず、原口がその道を進んだ、その岐路はどこにあったのか、これが大きな負い目として清岡に残された。

吉野は原口を清岡の「精神的分身」と形容する。「海の瞳」の記述から、このような傾向も読み取れる。だが、「アカシヤの大連」五部作から読み取れる若い頃の清岡の思想は、やはり、「二十歳のエチュード」で読み取れる原口の思想と、ある程度の差異があるのである。また、今まで論じていなかったが、終戦は、清岡の自殺への衝動を半減したが、原口にとって、こういう傾向が見られないことも指摘できる。

三 清岡の二人の差異を無視する書き方をする理由

二人は同じく「コロンの子」であるから、精神上の相似性が強いとはいえるだろう。ただし、ここの「相似性」とは、内地の人と違う体験に基づくものである。つまり、内地出身の人と同じにくい感情だが、清岡と原口なら互いに通じやすいことであるといえる。しかし、それだけで二人の精神の内核を同じだと判断することはできない。

ここまで「海の瞳」で、清岡が二人の相似性を強調しすぎていることを分析してきた。では、清岡が原口に仮託して自己の情緒と人生観を語る意味はなんだろうか。

まず、「海の瞳」の人称問題に着目しよう。

「アカシヤの大連」五部作はすべて、清岡本人をモデルにする人物を「彼」と称する。それに対して、それ以後の作品は「わたし」または「私」を使っている。この点から、清岡の心境が変化したことが垣間見える。一九七四年の「ある濁音」は、清岡の大連観の転換点である。この時点から、清岡はより客観的な視点で、故郷大連を見始める。

もう一方、「海の瞳」は一九七一年に発表されたものである。その時点で、「アカシヤの大連」五部作は、まだ完成していなかった。つまりその時点の清岡の心境には、主に大連時代の甘美さと淡い感傷に満たされ、それに対して、植民地二世の罪意識について、もちろん小説と詩には、ある程度反映されているが、まだよく整理されていなかった。

清岡は、自分の記憶とある程度の距離を持つために、「彼」という人称を使ったのではないだろうか。そうすることとで、大連時代の出来事をもっと客観的な視点で見ることが可能になる。しかしその後改稿によって、清岡は「彼」を「私」に変えた。

前述したように、「海の瞳」（初出の時点）と「アカシヤの大連」五部作以降の作品の人称は、すべて「わたし」と「私」である。また、その後改稿を経た「海の瞳」も「私」を用いている。作品の人称の変化と同時に、清岡の二つの変化が見られる。一つは、植民地二世は被害者であると同時に加害者であるという罪意識が、そのあとどんどん論理的な形に整えられていくことである。もう一つは、この変化に従って、ふるさと大連に対する郷愁は、土地もともとの主人「中国」に託されたことである。もちろん、二点目は、一点目で述べている思想上の変化の外在化である。この変化は、清岡前期と後期の作品の、人称の変化とつながっていると考える。

六十年代末から七十年代初めの清岡は、大連を懐かしんで書いたが、一九八二年にようやく待望の帰郷を遂げた時の詩作には、「大連」というテーマがあまり見られず、書かれたのは、主に中国の風景と人文に関するものであった。清岡の大連観の内部に生じた変化が明らかである。

「海の瞳」の人称の変化は、おそらく、清岡の心境のこれらの変化を反映している。清岡は自分の罪意識を認識して整理した上で、改稿によって人称を変えたのだ。

ただし、小説が初めて書かれた時（『文学界』連載時）、清岡はそのあとの作品のように、「罪」について論理的な考えがなかった。

その頃、清岡の小説のテーマは主に過去の自己、小さい頃の自己と妻の死による以前の自己意識の再現であり、まだ植民地二世と植民地の過去について深刻な考えまで進んでいなかった。ゆえに、「アカシヤの大連」などのナルシズムを読み取れる作品のように、過剰な自己意識をそのまま、自我の過去とその時の意識を小説に表現したのである。

一九八二年の「サハロフ幻想」は、「海の瞳」とかなり似た文体である。しかし、「罪意識」に関しては、相違点が

多くある。「サハロフ幻想」では、植民地二世である清岡の自我否定には、「被害者」と「加害者」の両面が共に存在しているということを明確的にあらわされている。

それに対して、「海の瞳」では、原口も、「私」も、単純に被害者の立場にある人物として描かれている。だが、この時点で、清岡はもうすでに植民者である「罪意識」を持っている。例えば、数年前にこのような詩がある⁽⁹⁰⁾。

わが罪は青　その翼空に悲しむ

つまり、『文学界』で「海の瞳」が連載されたときには、清岡は単に原口統三を追憶するつもりであり、深い思索を行うつもりはなかった。清岡は、この時点では、まだ「アカシヤの大連」を創作したときの心境である。妻が亡くなって、青春時代の問題にもう一度直面しなければならなくなったので、だからこそ自分自身の青春時代を小説にする欲望が高ぶって表現した。

清岡は生涯にわたり、原口統三、またはほかの植民地との関わりがある人との相似性を求めているようである。ここで、一例を挙げよう⁽⁹¹⁾。

明るい中庭を通って街路にでると、ある新聞社の人が「遠藤さんと文学的な交流があったのですか」とふしぎそうな顔をした。「むかし、大連で彼と私は隣り合った小学校に通い、おまけに同学年でね、それで周囲がほとんど気づかない親愛感を、おたがいにもっていたのです」と私は答えた。

だが、大連時代、清岡と遠藤は知り合いではなかった。同じ大連体験があることも、戦後東京で初めて知った。そ

れに對して、清岡は遠藤周作との文学的な交流は少なくなく、二人はよく新作をお互いに評する。ではなぜ、清岡はどうしても二人に共通の大連体験を強調したいのか。特に遠藤周作は、九歳まで大連にしか暮らしておらず、大連に對する感情も深いとは言えない。やはり、清岡は、植民地体験がある人々から、自分との相似性を取り出す必要があると考えているのではないだろうか。

これは「海の瞳」ができた数十年後のエッセイであるから、清岡の意欲を表現する傍証にしかない。だが、清岡が自分のアイデンティティについて、一生悩んでいたことは確実である。前述のように、彼の故郷と国家の認識は分裂している。本土で生まれた日本人と認識が一致できないから、分裂した意識を持ちつづけている。宇佐美育の論述から、このようことが垣間見える¹²⁾。

かつての日本の植民地の繁栄と豊かさの象徴であると同時に、他国への侵略という「罪障」を免れることのできない宿命の都市・大連で生まれ育った詩人が、はるばる海を越えて本土の首都にやってきて、……

似た体験をもっていたから、清岡は原口との共通性を重視したと言っても過言ではないだろう。しかしこれを重視するからこそ、無意識的に原口との違う点を無視する傾向があつたのではないだろうか。

清岡にとつての原口は、原口にとつての清岡とかなり異なっている。原口にとつて、清岡は「憧れの先輩」であり、彼にとつて、清岡はランボーのような面白い人物である。逆に、清岡にとつて、原口は「一番親しかった友人」である。つまり、清岡が、原口の人生観に影響をあたえたことは明らかであるが、原口に影響されたことはおそらくない。原口の方は清岡の詩にかなりの愛着をおぼえており、精神上でも清岡からの影響を受け取っている。清岡も、

もちろんこの点を知っている。自分の人生観に影響された原口なら、自分の人生観に基づいて彼の言動を考えることはとても自然なことだろう。このようにかんがえたのではあるまいか。

清岡の詩に傾倒したからこそ、原口は清岡のファンになり、清岡の考えることをある程度に受け入れた。しかし、一九四五年の夏、東京に戻った後、原口にとって、清岡の詩の影響はどんどん弱くなってきた。それゆえ、二人の精神世界のつながりは弱くなった。橋本一明は、このように記述している⁽¹³⁾。

僕自身は清岡さんと話したこともない。けれども統さんが「弟子としての性格」を具えてゐたとしたら、清岡さんは統さんの上に重大な存在である。それ以上に「主従物語」の表題の意味と統さんのイマージュへの合点のために清岡さんを一応紹介しなければならぬ。

原口の一歩親しい友人である橋本一明であっても、清岡と原口の関係を「主従」関係として理解している。だが、この「主従」関係は、いつでも変わらないわけではない。自殺の時点に近くなれば近くなるほど、清岡の思想上の影響が薄くなっている。ここで、橋本一明が記述した原口の言葉を引用する。

君（橋本一明——引用者注）はさう言ふけれど、清岡さんの詩はそんなに優れたものではないよ。詩の上から見たら同じ頃にできた僕の詩の方が、ずっと純粹なものだったさ。

ここから、清岡の詩より、原口は自分の詩の方が純粹だと考えている。そして、これは自殺する半年くらい前の話である。詩で反映できる「純粹」さは、もちろん原口の世界の表現である。また、同じ頃、原口の清岡の詩を讀

える話も残っているから、引用部分は二人の詩作の良し悪しを評価する論拠としてはよわいが、この引用から、原口は二人の精神世界の差異を感じていたことが明らかだ。原口の論理はもともと清岡に影響されて成立したものであるが、そのあと論理の内実がどんどん変化した。清岡にない純粹さは、論理の内実を清岡とは異なるものにしたのである。

つまり、東京に帰ってから自殺までの一年半の原口の思想上の変化は激しかったが、大連に留まった清岡は、この時点から原口の変化をきちんと理解できるチャンスがなかったたのである。清岡にとっての原口の思想と人生観は、一九四五年、アカシヤの花が咲き乱れる大連時代まで永遠にとどまったのである。

清岡のイメージの中の原口は、実際の原口と違うといえる。一九四五年の原口の思想は、一九四六年の原口の思想より清岡の思想と近い。一九四六年の原口の精神上の変化を把握できない清岡が書いた「海の瞳」では、真実の原口を反映しようとしても、一九四五年までの原口しかうまく反映できないのである。一九四五年の原口の思想は、もと清岡が持っていた思想と近い。ゆえに「海の瞳」での原口の考えは、過去の清岡が持っていたものであるというより、むしろ一九四五年の時点の二人共通の考えであったと言っても良いだろう。

その後、原口は清岡の影響から脱却し、その論理が完成し、自殺にいたるのである。

註(1) 当論文における「海の瞳」の本文引用は、『清岡卓行大連小説全集』（日本文芸社、一九九二年）に拠る。

また、初めて単行本になった際（文藝春秋、一九七一年）、章の区切りが調整したが、人称はまだ「彼」から「私」に変われていなかった。

- (2) 清岡卓行「アカシヤの大連」（『清岡卓行大連小説全集』、日本文芸社、一九九二年）
- (3) 清岡卓行「原口統三——「私の中の日本人」を問われて」（『随筆集サンザシの実』、毎日新聞社、一九七二年）

(4) 清岡は作品で、故郷観を言及するとき、ほぼ故郷は「風土のふるさと」と「言語のふるさと」二つに分裂したと書くが、「ふるさと土佐」だけで、「風土のふるさと」、「言語のふるさと」、「血縁のふるさと」三つに分裂したと書いた。

(5) 「アカシヤの大連」によって、彼の憂鬱の哲学の中で、二つの死がある。それは「凄惨な死」と「甘美な死」である。

「凄惨な死」とは、戦争に巻き込まれ、肉体が直接消滅させられるというような、事実上の死である。そして、「甘美な死」とは、現実から逸脱し、幸福を求めるための観念上の死である。このような死は、あの時の清岡の精神世界に存在しており、現実にある地獄のような状況の対立面に存在している死である。彼にとって、現実における「凄惨な死」は何の意味も持っていない犬死である。それに対して、「甘美な死」は、精神世界の願いにより、願いを叶えるために、自分で選んだ死に方である。

(6) 私の修論である。

(7) 「清岡卓行〈大連小説〉論——追憶と現実のふるさと」(法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻 修士論文 二〇一九年三月)

「アカシヤの大連」で、モデル人物は清岡の主人公は、モデル人物は清岡の妻の女性の可愛い姿を見た後、「ああ、きみに肉体があるとはふしぎだ!」と嘆いた。また、詩集『氷った焰』に収録されている詩「石膏」の一行である。

しかし、もし感嘆の対象が彼女だけであったとするならば、すこし違和感がある。彼女は現実には生きていて人であるから、彼女には肉体があることが不思議と感じることこそ不思議である。この感嘆は、確かに彼女の肉体を見た後の感想であるが、実際は、彼女が彼のそばに存在するという事実が、意識の中の「憂鬱の哲学」にかかわる女のイメージに肉体を与えたことに感嘆したということである。

(8) 三木卓「対象を失った愛」(講談社 現代の文学35、一九七三年三月)

(9) 吉野弘「書評」(公明新聞、昭和四十六年十月)

(10) 清岡卓行『空』(清岡卓行詩集)、思潮社、一九六九年)

(11) 「遠藤周作の葬儀」(随筆集 偶然のめぐみ)、日本経済新聞出版社、二〇〇七年)

(12) 宇佐美斉「清岡卓行の円形広場」、二〇〇六年六月三日

(13) 橋本一明「作品に関して」(『死人覚え書』、青土社、一九七六年)

(14) 大連時代で、清岡はずっと日本人のために作った美しいところで生活していた。被支配者である中国人が暮らしている醜い場所は詳しくなかった。また、中国人の知り合いもほばいなかった。

(おう てんき・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)